

2018/08/19

「絶望」

キリストを信じない人たちは、仕事が行き詰まったり、どうにもならない病気になったり、財政的に行き詰まったり、何をやっても失敗したり、不運な出来事に遭ったりといった患難に遭遇すると、「もうダメだ」と言って「絶望」します。その絶望の頂点に君臨するのが肉体の死です。

ところが、キリストを信じる者であれば、そうした事柄は絶望に値しないと聖書は言います。肉体の死でさえ、絶望ではないと言い切ります。ヨハネの福音書には、ラザロの復活の話がありますが、ラザロは死んだが死に至りませんでした。イエスは死んだラザロをよみがえらせたことで、死は絶望に値しないことを証明されたのです。また聖書は、次のように教えています。

「私たちは、四方八方から苦しめられますが、窮することはありません。途方にくれていますが、行き詰まることはありません。」(Ⅱコリント 4:8)

人が患難に会っても、キリストを信じる者であれば神に助けられるので、絶望することはないのです。ならば、神はどのように助けてくれるのでしょうか。それは「永遠のいのち」によつてです。キリストを信じる者は「永遠のいのち」を持っているから、患難は絶望になどならないのです。

「まことに、まことに、あなたがたに言います。信じる者は永遠のいのちを持っています。」
(ヨハネ 6:47)

「永遠のいのち」は、肉体の死も、人の覚える様々な困難も、この世の出来事は何でも呑み込んでしまいます。それが何を叫ぼうとも、どのように人を脅そうとも、何もなかったかのように消し去ってしまいます。そして、変わらない平安をもたらしてくれます。キリストを信じない人がいう絶望は、キリストを信じる者には絶望になどならないのです。かえってキリスト者にとっては、「患難さえも喜んでいます」(ローマ 5:3) となります。

ならば、キリストを信じる者には絶望などないのでしょうか。とんでもありません。キリスト者は「永遠のいのち」を持つようになったことで、全く思いもよらぬことに絶望するようになったのです。キリストを信じていないときには知らなかったある出来事に、患難を覚え絶望するのです。その絶望は、今までの絶望を呑み込んでしまうほど大きなものです。

幼子は、大人が怖がらないことを恐れます。例えば幼子は、部屋が暗くなることを恐れますが、大人は恐れませんが、大人は恐れませんが、大人はもともと怖い事を知っているので、そうしたことを恐れないのです。大きな恐れを知ると、小さな恐れはそれに呑み込まれてしまい恐れではなくなってしまいます。キリスト者も同様です。「永遠のいのち」を持つようになったことで新たな恐れに直面し、そのことに絶望したのでした。それは一体何なのでしょう。

【キリスト者の絶望】

(1) 完全な者と見なす

キリストを信じる者は「永遠のいのち」を持っています。「まことに、まことに、あなたがたに言います。信じる者は永遠のいのちを持っています」(ヨハネ 6:47)。その者は決して滅びることがなく、「永遠」です。「わたしは彼らに永遠のいのちを与えます。彼らは決して滅びることがなく、また、だれもわたしの手から彼らを奪い去るようなことはありません」(ヨハネ 10:28)。

しかし、「永遠」というのは神の形容であり、神が暮らす世界です。そこは完全でなければ入ることはできず、罪人には到底入ることなどできません。罪と神とは共存できないのです。罪がある限り、人は「永遠」になどなり得ないのです。ですが、イエス様は、「まことに、まことに、あなたがたに言います。信じる者は永遠のいのちを持っています」(ヨハネ 6:47)と言われ、キリストを信じる者は神の目に「完全な者」だと言われたのです。実際には、「完全な者」にはなっていませんが、イエス様は私たちのことを「永遠のいのち」を持つ「完全な者」だと言ってくださいました。これは驚くべきことです。

実は、イエスがそう言われるのには根拠があります。その根拠とは、人は神の似姿として造られたということです。「さあ、人をわれわれのかたちとして、われわれの似姿に造ろう」(創世記 1:26 新改訳 2017)。神の本質が人の本質なのであって、人は神の部分にほかなりません。「私たちはキリストのからだの部分だからです」(エペソ 5:30)。良い行いをする完全な姿が人の本来の姿なのです。

「私たちは神の作品であって、良い行いをするためにキリスト・イエスにあって造られたのです。神は、私たちが良い行いに歩むように、その良い行いをもあらかじめ備えてくださったのです。」(エペソ 2:10)

ところが、現実の私たちはどうでしょう。人は神に似せて造られているので、何が良い行いかは分かっています。それを実行したいと、心から願います。だが現実には、それができないのです。自分が憎むことをしてしまいます。

「私には、自分のしていることがわかりません。私は自分がしたいと思うことをしているのではなく、自分が憎むことを行っているからです。」（ローマ 7:15）

キリスト者は、この現実をめまいを起し絶望します。パウロは、神から「義」を宣言され、「完全な者」と見なされましたが、実際のところは、「自分が憎むことを行ってしまう」みじめな者でしかありませんでした。パウロはこの現実をめまいを起し、絶望したのです。

「私は、ほんとうにみじめな人間です。だれがこの死の、からだから、私を救い出してくれるのでしょうか。」（ローマ 7:24）

「私は、ほんとうにみじめな人間です」、これこそがキリスト者の絶望なのです。キリスト者は、自らの本質が「永遠」であると知ったからこそ、すなわち「良き者」だと知ったからこそ、自らの現実を見て、罪を犯す自分を見て絶望するのです。「神はお造りになったすべてのものを見られた。見よ。それは非常に良かった」（創世記 1:31）は真実だと知ったことで、自分の罪に耐えられなくなり絶望するのです。その中でパウロは、人が罪を犯してしまうのは、「死」が入り込んだせいであることを神から教えられました。

「それゆえ、ちょうど一人の人を通して罪がこの世に入り、罪を通して死が入り、まさしくそのように、全ての人たちに死が広がった。その結果、全ての人が罪を犯すようになった。」（ローマ 5:12 私訳）

「死」が人を支配したことで、罪が君臨するようになったことを教えられたのです。「それは、罪が死によって支配したように」（ローマ 5:21）。「死」とは有限性であり、人は有限性になったがゆえに罪を犯すのです。

このように、キリスト者が覚える絶望は、永遠性という本質（魂）と、有限性という現実（体）との違いで生じます。ですが、永遠性など認めない、神を信じない者にしてみれば、有限性が全てなので、そのような絶望は生じません。永遠性など認めない者は、有限の世界で良い行いのできる者が「良き者」であり、悪いことしかできない者が「悪い者」であって、全ては自らの行いによって決まるとするので、自分の現実と本質を比べ絶望するということはありません。彼らの絶望は、有限の世界で生じる困難であり、彼らの喜びは、有限の世界に於ける富となります。

（2）この絶望は病

ならば、どうして永遠性の中に有限性（死）が入り込んだのでしょうか。人が自らの意志で有限性を選んだのでしょうか。とんでもありません。私たちは生まれながらに有限性でした。

悪魔の仕業でアダムが罪を犯して以来、人は死んだ者（有限性）になったので、私たちはみな自動的にそのように生まれてきました。「すなわち、アダムにあってすべての人が死んでいるように」（Ⅰコリント 15:22）。すなわち、有限性というのは今の私たちのした設定ではないということです。無論、神がした設定でもありません。神にとって「死」という有限性は、滅ぼすべき敵です。

「最後の敵である死も滅ぼされます。」（Ⅰコリント 15:26）

ということは、永遠性という本質と、有限性という現実との違いに絶望するのは、正常な反応ということになります。本来人は神に似せて造られていたのであって、永遠性しかありませんでした。そこに悪魔の仕業で「死」が入り込み、人の「体」は有限性になったのです。したがって、人の現状の姿は「病」ということになります。キリスト者がする絶望は、紛れもなく病ゆえです。

ただし、キリスト者でなくても人には誰であれ、神と同じ永遠性という土台があるので、この絶望を味わう人たちは大勢います。永遠性と有限性という現実をめまいを起こす者は、大勢います。そうであっても彼らはキリストを信じないので、その永遠性が何を意味するかまでは分からず、罪も分かりません。彼らにとってその絶望は「不安」でしかありません。永遠である「良心」に責められ、有限である時間に責められ「不安」になります。ですがその「不安」が、キリストとの出会いに結びつくのです。

このように、人は永遠性という「魂」と、有限性という「体」を持ち合わせていることでめまいを起こし絶望します。しかし、この絶望は入り口に過ぎません。人は絶望すると、何としても有限性という自己から逃げようとし、死の体から逃げようとするのです。「死の体」は罪を犯させるので、「〇〇のような人になりたい」という願望を抱き、別の自分を目指します。そのことで、自己から逃げようとし、死の体から逃げようとするのですが、どんなに別の自分を目指そうとも「死の体」という自己からは誰も逃れられないので、再び絶望へと戻ってきます。それでパウロは、こう叫びました。

「私は、ほんとうにみじめな人間です。だれがこの死の、からだから、私を救い出してくれるのでしょうか。」（ローマ 7:24）

だからといって、有限性だけになれるかという、キリストと結びついた「永遠のいのち」を持っているので、有限性だけにもなれません。有限性だけとなって死のうとしても、死ねないのです。ラザロのように、死んでも生きる者にされてしまうから、永遠という自分から逃れることは不可能なのです。このままだと、有限性という時間は絶えず永遠に触れられてしまうので、いつまでも「絶望」が続いてしまいます。このことに気づくとき、絶望はさらに深いものとなります。

ですが、キリストを信じない者は、事情が異なります。彼らも神に似せて造られたので、土台に永遠を持っています。ただし、その永遠はキリストとの結びつきがないために機能していません。肉体の死をもって終わりとなります。テレビは電波を受信して初めて映るのであって、受信しない限りただの器にすぎないのと同じ理屈です。「魂」という永遠性も、神と結びつかない限りただの器であり、肉体の死と同時に無となります。それでキリストを信じない者は肉体の死を恐れ、死が近づくと絶望するのです。それゆえ、その絶望は、実に正しいと言えます。いずれにしても、絶望はどうにもならないものなので、これは「病」という位置づけとなります。ならば、この病は長所なのか、それとも短所なのでしょう。

【絶望は長所、それとも短所】

(1) それは長所

人は病気になる弱い体を「短所」と見ます。「短所」とみなすから、強い体を目指します。しかし、絶望という病は「長所」にほかなりません。「絶望」は人間だけがする特権です。神の「いのちの息」で造られたゆえに、「永遠性」を持ち、現状の「有限性」との間にギャップを覚えるのです。動物は、神の「いのちの息」が吹き込まれていないため、「永遠性」を知りません。その自己は完結しているので、現状と本質を比べて絶望に至ることはないのです。

つまり、人間だけが絶望するということです。人間は永遠という可能性を持っているがゆえに、現実性に絶望する可能性を持っています。これは人間だけの長所であり、人間がいかに崇高であり、「良き者」であるかを証ししています。そうでなければ、人は自らの現実性に絶望などしないからです。人が病気を恐れるのは、健康である自分を知るからであり、初めから病気で、初めからそのように造られていたのであれば、病気を恐れることはありません。むしろ、健康になることを恐れます。それは、自分が知る自分とは違うからです。

それゆえ、神の恵みも絶望という病にこそ働きます。自らを偉いとする者には働きません。絶望するしかない弱さを自覚する者の上に、神の恵みが働くのです。

「しかし、主は、「わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現れるからである」と言われたのです。ですから、私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで私の弱さを誇りましょう。」(Ⅱコリント 12:9)

ならば、どのような恵みが働くのでしょうか。

【十字架に死ぬ】

(1) 十字架に死ぬ

キリスト者は、永遠性と有限性という自己の矛盾に苦しみます。永遠性は「心」であり、心では神の律法に仕えます。しかし、有限性は「肉」であり、肉では罪の律法に仕えてしまいます。「この私は、心では神の律法に仕え、肉では罪の律法に仕えているのです」(ローマ 7:25)。この矛盾にキリスト者は絶望します。要するに、なぜ良き者として造られた私たちが罪を犯してしまうのかということに絶望します。

しかし、キリストは、罪を犯させる「肉」との決別が可能であることを示されました。それが十字架の死です。キリストは、私たちが「肉」と決別できることを示すために、自らも「肉」を身にまとして地上に来られ、十字架で死んで見せてくれました。そして、永遠性だけになってよみがえられました。それは、私たちもキリストとともに「肉」に死ぬことができ、「永遠のいのち」を土台とした生き方ができることを教えるためでした。つまり、「肉」という私たちの古い人はキリストとともに十字架に付けられるのです。そのことを知るなら、「肉」の体は滅び、罪の奴隷ではなくなることを知るようになります。

「私たちの古い人がキリストとともに十字架につけられたのは、罪のからだが減びて、私たちがもはやこれからは罪の奴隷でなくなるためであることを、私たちは知っています。」
(ローマ 6:6)

この十字架の死にあずかるための入り口が、キリスト者の絶望です。なぜならキリストは、その者に十字架の光を照らし、十字架の贖いを受けさせてくれるからです。有限という「肉」に死に、頂いた永遠という「いのち」にあって新しい歩みをさせてくれる贖いです。

「私たちは、キリストの死にあずかるバプテスマによって、キリストとともに葬られたのです。それは、キリストが御父の栄光によって死者の中からよみがえられたように、私たちも、いのちにあって新しい歩みをするためです。」(ローマ 6:4)

私たちはこの事実を、「信仰」で受け取ります。私たちは「信仰」で十字架に死に、キリストと共に生きる者になったと信じるのです。

「もし私たちがキリストとともに死んだのであれば、キリストとともに生きることにもなる、と信じます。」(ローマ 6:8)

「信仰」で、自分は罪に対しては死んだ者であり、神に対してはキリスト・イエスにあって生きた者だと思うのです。

「このように、あなたがたも、自分は罪に対しては死んだ者であり、神に対してはキリスト・イエスにあって生きた者だと、思いなさい。」(ローマ 6:11)

(2) 闇に輝く光

絶望は色で表すと黒であり、空間で表現すると闇です。闇の中であって初めて、人は本気で光を求めるようになります。その光は、イエス・キリストの十字架であり、闇の中ではそれだけが輝いています。そして、闇はこの光に勝つことができません。

「光は闇の中に輝いている。闇はこれに打ち勝たなかった。」(ヨハネ 1:5 新改訳 2017)

絶望していないときというのは、周りに色々な光が見え、どれが本物の光なのか分かっていません。むしろ、偽物の光の方が美しく輝いて見えます。ですから絶望しない限り、人は十字架の光を求めることはありません。しかし、絶望という闇の中では、この世のいかなる光も輝くことはできなくなります。

正確に言うと、今まで美しく輝いていたこの世の光が、その輝きを失うのが絶望です。永遠性である自分に気づき、完全であると言われる自分に気づき、すなわちイエス・キリストという「永遠のいのち」を持つようになり、「この方こそ、まことの神、永遠のいのちです」(Iヨハネ 5:20)、今まで見えなかった罪深い自分が見えるようになり、美しく輝いていたこの世の光は輝きを失ったのです。世の中の光は、罪人に対し全くの無力であったために輝きを失いました。これが絶望です。すると、闇の中に輝く光が見えてきます。それが十字架の光です。

先週は不安の処理について話しましたが、不安になる度に、罪を言い表し、私たちは平安を手にすることができます。しかし、それを繰り返す先に待っているのは絶望です。私たちは、どうにもならない罪に気づくようになり、そして絶望します。この絶望は、罪を言い表し赦されるという処理では間に合いません。絶望は、十字架の光に気づき、十字架の死に至ることでは解決できません。まことに絶望は、イエス・キリストにある「いのち」に堅く立たせてくれる長所であり、まことの希望を私たちに届けてくれるものなのです。

イエスはそのことを教えるために、十字架の死に至る前に絶望されました。

「イエスは、苦しみもだえて、いよいよ切に祈られた。汗が血のしずくのように地に落ちた。」(ルカ 22:44)

そしてイエスは十字架で死なれ、栄光の姿となってよみがえられました。イエスは、「絶望」の先にこそ希望があることを、自らが死ぬことで私たちに示されたのです。